

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：徳重 あつ子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	寝たきり予防, 認知症予防, 高齢者の健康の維持・増進
学位	最終学歴
博士(看護学)	大阪大学大学院医学系研究科 博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		

2 作成した教科書、教材		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会 交流集会主催 2. サンケイリビング「ミセスの一日大学生：目指せ！アクティブエイジング」講師 3. ひらかた市民大学（市内6大学連携講座）講師 テーマ「アクティブエイジング看護講座 ～回想法とコグニサイズで脳を活性化させよう！～」 4. 国家公務員共済組合連合会 枚方公済病院 研究指導 5. 京都府看護教員養成講習会 在宅看護論演習 講師 6. 京都府訪問看護ステーション協議会 研究指導 7. 明治国際医療大学看護学部 リカレント学習講座 フォローアップ研修講師 8. 独立行政法人国立病院機構京都医療センター附属 京都看護助産学校 「看護研究」講師 	<ol style="list-style-type: none"> 2018年03月17日 2018年03月15日 2015年11月28日 2014年04月01日～2015年03月31日 2010年08月 2010年04月01日～2014年03月31日 2009年11月 2007年04月01日～2009年03月31日 	<p>臨床現場における認知症ケアの質向上： 認知症高齢者のケアの質を上げるための取り組みについて、提言と討論を行なった。</p> <p>徳重 あつ子、横島 啓子、荒木 大治、岩崎 幸恵、杉浦 圭子、梅澤 路絵、浅田 知子、岩見 明子、大越 幸代、大納 英美、源野 幸世、前田 景子、宮地 由紀子</p>

4 その他		
<ol style="list-style-type: none"> 1. リラクセーション看護法指導者 レベル1、2、3 修了認定 	2014年03月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要

1 資格、免許		
<ol style="list-style-type: none"> 1. 養護教諭一種免許 2. 2級カラーコーディネーター 3. 保健師免許 4. 2級福祉住環境コーディネーター 5. 介護支援専門員 6. 看護婦免許 	<ol style="list-style-type: none"> 2010年12月1日 2010年06月20日 2004年04月19日 2000年11月5日 1999年03月17日 1989年4月28日 	

2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
<ol style="list-style-type: none"> 1. 京都市要介護認定訪問調査員 2. 京都市介護認定審査会委員 	<ol style="list-style-type: none"> 1999年11月01日2001年06月30日 1999年11月01日～2001年3月31日 	

4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要

1 著書				
<ol style="list-style-type: none"> 1. 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手 -TE-ARTE学入門- 	共	2011年10月	看護の科学社	看護で活用できる補完代替療法についてまとめたものである。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2. 地域看護と地区診断－保健師のあゆみをふまえて－	共	2010年03月	窓映社	<p>本人担当部分：第2部TE-ARTEの価値の第3章「TE-ARTEと補完代替療法（CAM/CAT）の変遷と課題」を担当した。そのうち「CAM/CATにおける世界の歴史」（p. 73-84）、「看護におけるCAM/CATの課題への取り組み」（p. 93-100）は単著である。</p> <p>編集：川島みどり 共著者名：川島みどり、小坂橋喜久代、尾崎フサ子、小山敦代、徳重あつ子、五十嵐稔子、山口創、木本明恵、八塚美樹、平松則子、大宮裕子、向野義人、守田美奈子、グライナー智恵子</p> <p>地区診断の実際について、実例を踏まえながらまとめたものである。</p> <p>本人担当部分：第3章 3-5、「個人、家族への支援と地区診断 ～在宅看護への活用～対象別の社会資源の活用」 高齢者（特に虐待のある者）、障害者における社会資源の活用方法について述べた。（p. 75-78単著） 編集：榎本妙子、福本恵 共著者名：植村小夜子、大籠広恵、田中小百合、徳重あつ子、福本恵、堀井節子、榎本妙子、三橋美和</p>
2 学位論文				
1. 脳波α・β帯域のパワー値からみた大脳を活性化させる看護ケアとしての坐位姿勢援助の検証（博士学位論文）	単	2009年03月	大阪大学大学院	<p>本研究の目的は、仰臥位から坐位への姿勢変化が大脳を活性化させるかどうかを脳波を用いて測定し、看護ケアとしての坐位姿勢援助の検証を行うことである。研究1では基礎的な検証を行い、研究2では臨床における検証を行った。研究1の被験者は健康成人男女30人で、測定項目はベッド挙上角度80度と30度における脳波パワー値と主観調査である。80度は自力坐位に近く、30度は臨床で用いられる角度であることより設定した。結果、30度よりも80度の方が有意な脳活性が示され、主観調査は脳波の結果と一致していた。研究2では、まず健康高齢者男女10人を被験者として予備実験を行った。ベッド挙上角度は臨床で用いられる70度と30度とした。結果、70度に一部有意な脳活性が認められたのみで、成人と高齢者ではベッド上坐位における脳活動が異なることが示されたため、本実験では、ベッド上と椅子（車椅子）坐位の実験を行うこととした。本実験の被験者は介護老人福祉施設入居者男女17人であった。結果、椅子坐位のみにより有意な脳活性が認められ、大脳を活性化させる看護ケアとしては、ベッド上よりも椅子坐位への援助を行う方が望ましいことが示唆された。</p>
2. 仰臥位から座位への姿勢変化がもたらす脳活性への有効性の研究－脳波と近赤外線測定装置による脳活性の分析から－（修士学位論文）	単	2006年03月	大阪大学大学院	<p>本研究の目的は、仰臥位からギャッチベッド上での坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を「脳波」と「大脳局所Hb値」の分析によって明らかにし、大脳を活性化させるケアとしての坐位姿勢援助の有効性について、基礎的な検証を行うことである。被験者は、研究の同意を得られた健康成人30名である。ベッドの挙上角度を変えた「実験A（坐位80度）」と「実験B（坐位30度）」の二つの実験を行った。測定項目は、脳波、左前額部の局所ヘモグロビン値（総Hb、酸化Hb、還元Hb）、自律神経機能評価指標（HF値：副交感神経活動指標、%LF値：交感神経活動指標）、主観調査である。分析を行う区間設定を「仰臥位」、「坐位1期」、「坐位2期」、「坐位3期」の各5分毎とし、実験A・Bのそれぞれの仰臥位時の値をbaselineとした。その結果、ギャッチアップによる坐位姿勢は、大脳と交感神経活動を活性化させる作用があることが明らかとなった。また、どの測定項目においても「実験A」の方が「実験B」よりも活性化を示し、重力による影響が考えられた。臨床における活用については、継続した研究が必要である。</p>
3 学術論文				
1. 地域包括支援センターの看護師による閉じこもり高齢者への介入内容《査読付き》	共	2019年02月	第49回（平成30年度）日本看護学会論文集 在宅看護、pp. 19-22	<p>閉じこもり高齢者が何らかの支援の利用に至ったプロセスを明らかにするために、看護師がどのような介入を行ったか検討することを目的として研究を行った。その結果、地域包括支援センターの看護師は、①定期的に訪問し、対象者のニーズをつかみ信頼関係を形成し、②看護師としての知識や技術を活用しながら、心身の状態から必要なサービスを提案し、継続した関係性への支援を行うことで、閉じこもり高齢者がサービスを含めた支援を受けることができるように介入していた。</p> <p>本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 松山美恵子、横島啓子、徳重あつ子</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 介護老人保健施設入居者における手指刺激がもたらす脳活動から考える手洗いケア 《査読付き》	単	2018年01月	日本健康医学会誌、26(4)、pp. 248-256	寝たきりの高齢者や認知症のある高齢者においては、食事摂取時に大脳の覚醒状態が十分でないと窒息の可能性もある。そこで、本研究では食前の手指の清潔ケアが生体を活性化させるかどうか、また熱布と温湯を用いたケアの違いによって大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについての基礎的な検証を行った。その結果、高齢者の手洗い援助を行う際には、大脳活性の観点から熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいことが示唆された。
3. 排尿障害を有する回復期病棟脳卒中患者に対する排尿援助についての実態調査 《査読付き》	共	2017年12月	リハビリテーション連携科学、18(2)、pp. 143-151	【目的】回復期脳卒中患者の排尿援助の実施状況、特に排尿日誌の活用、行動療法の実施、多職種連携の状況について明らかにする。【方法】近畿圏下でリハビリテーション科を有し、脳血管疾患等リハビリテーションの施設基準認定を受けている病院を等間隔抽出法により選定し、回復期脳卒中患者が入院する病棟師長から排尿援助についての回答を得た。【結果】排尿日誌の活用割合は、32.2%で、行動療法の実施割合は、75.7%であった。行動療法を未実施の病棟のうち20.8%は行動療法を聞いたことがないと回答していた。排尿援助は、看護師と看護補助者もしくは介護職の組合せで74.3%が連携していた。【結論】排尿日誌の活用割合は、行動療法の実施割合の半数程度であった。排尿日誌の活用割合が行動療法の実施割合に近づくこと、行動療法の普及、実施率の向上が望まれる。また、排尿援助は、看護師と看護補助者もしくは介護職が連携して実施していることが多かった。研究計画、分析方法の検討を担当。(担当頁特定不可能) 鈴木みゆき、徳重あつ子、竹田千左子
4. 高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者における排尿状態と非麻痺側上肢・下肢筋肉量との関係 《査読付き》	共	2017年07月	日本健康医学会雑誌、26(2)、pp. 103-111	研究目的は、高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者の排尿状態と非麻痺側筋肉量との関連を明らかにし、非麻痺側筋肉量との関係から排尿回数、尿意回数、失禁回数、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数の意義を検討することである。対象は、回復期リハビリテーション病棟に入院中の高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者8名である。研究方法は、入院2週目と10週目に排尿日誌を活用して排尿状態を把握するとともに生体電気インピーダンス法による筋肉量の測定を行い、その関係を分析した。その結果、初回調査では、非麻痺上肢筋肉量が失禁回数と負の相関関係($r=-0.88$)にあり、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数と正の相関関係(いずれも $r=0.78$)にあった。介助を受けながらであっても、失禁回数が少ないこと、トイレに誘導される回数が高いこと、実際にトイレで排尿する回数が多いことが、非麻痺側上肢筋肉量が多いことに関係していた。また、初回調査では、非麻痺側下肢筋肉量と尿意回数、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数との間に有意な正の相関関係($r=0.82-0.88$)、失禁回数との間には負の相関関係($r=-0.89$)が認められた。2回目調査では、非麻痺側下肢筋肉量と尿意回数、トイレ排尿回数との間で有意な正の相関関係(いずれも $r=0.80$)、失禁回数とは負の相関関係($r=-0.94$)が認められた。尿意があればあるほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性があった。また、トイレに行けば行くほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性も認められた。そして、失禁が少なければ少ないほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性が明らかになった。排尿行動は、移乗や移動、立ち上がり、立位保持、衣服の着脱などの多くの動作を含み、1日の中でも繰り返し行われる。失禁の有無に関わらず、介助を受けながらであっても、トイレに行き、排尿を試みる動作の回数が多いことが、非麻痺側筋肉量の多さの観点から有意義であることが示唆された。本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。(担当頁特定不可能) 鈴木みゆき、徳重あつ子
5. 訪問看護師からみた家族介護者の補完代替療法利用の傾向 《査読付き》	共	2016年12月	明治国際医療大学誌、15、pp. 11-16	【目的】介護者の補完代替療法(CAM)の利用の傾向を把握することである。【方法】全国の訪問看護ステーションの約30%にあたる1,700事業所を無作為抽出し、訪問看護師を対象に自記式質問紙調査を行った。分析は質問項目ごとに単純集計を行い、CAMの実施の有無及びCAMへの興味の有無と、相談の有無、効果の有無との関連性をみるために χ^2 検定を実施した。自由記載の文章は内容分析の手法を参考に行った。【結果】訪問看護師はケース全体のうち僅かな介護者にCAM利用がみられ、「がん」の方を世話する介護者に多く、要介護者のADLによる差はなく、「マッサージ」「栄養補助食品」の利用と、「疲労回復」「

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6. 家族介護者の補完代替療法利用に関する訪問看護師の認識 《査読付き》	共	2016年05月	日本統合医療学会誌、9 (1)、pp.94-98	精神安定」の利用目的が多い傾向があると把握していた。相談内容は【情報提供を希望する】【CAMを利用する理由】【利用に際して確認を求める】【利用の報告】の4個のカテゴリに分類された。CAMを実施する事業所では介護者からの相談があり、CAMは効果があるとの報告が多かった。【考察】本結果は訪問看護師が日々の活動の中で得た情報であり、介護者一人一人の状況を反映しているとはいえないが、介護者のCAM利用や相談内容の傾向を把握できたと考える。 研究計画、分析方法の検討、調査実施を担当。(担当頁特定不可能) 田中小百合、徳重あつ子
7. Examining Handwashing Care in Assist-ed-Living Facilities from the Perspective of Hand and Finger Stimulation to Induce Brain Activation in the Residents (介護老人福祉施設入居者における手指刺激がもたらす脳活動から考える手洗いケア) 《査読付き》	単	2016年02月	Open Journal of Nursing, 6 (2), pp.115-124	介護者自身の補完代替療法 (CAM) 利用について、訪問看護師はどのように認識しているのか明らかにすることを目的に、全国の訪問看護ステーションに郵送調査を行った。介護者CAM利用をどのように思っているか自由記述を求めた箇所についてテキストマイニング手法を用いて分析を行った。その結果、6回以上出現した語は61語あり、これらを対象にクラスター分析を行ったところ、8つの区分に分類された。クラスターの解釈を行ったところ、大きく「介護者がCAM利用することへの肯定的理解」「CAM利用方法への提案」「相談時の看護師対応」の3つに分類できた。介護生活の継続のためにもCAM利用を肯定的に捉え、必要性が高いと認識している看護師が多かった。 研究計画、分析方法の検討、調査実施を担当。(担当頁特定不可能) 田中小百合、徳重あつ子
8. The Direction of Research on Active Aging and Healthy Life Expectancy in Japan (日本におけるアクティブエイジングと健康寿命研究の方向性) 《査読付き》	共	2014年05月	Open Journal of Nursing, 4 (7), pp. 475-482	本研究では、介護施設に入居中の高齢者を対象に、食前の手指の清潔ケアが生体を活性化させるかどうか、また熱布と温湯を用いたケアの違いによって大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについて、基礎的な検証を行った。その結果、高齢者の手洗い援助を行う際には、大脳活性の観点から熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいことが示唆された。 日本では、2025年には団塊の世代と呼ばれる国民の18.1%の人口が後期高齢者となるため、それを支える基盤づくりが必要である。そこで、本研究ではアクティブエイジングという側面から文献検索を行い、日本における取り組みや研究の動向を明確化し、次の研究課題を検討することを目的とした。「アクティブエイジング」と「健康寿命」の検索結果を合わせて、原著120件、総説・解説・特集213件をそれぞれ分析対象とし、全ての論文のabstractについて、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。その結果、原著論文からは【保健統計】、【性別】、【年齢】、【疾患】等の8カテゴリが抽出された。総説・解説・特集からは【方向性】、【疾患】、【生活】等の16カテゴリが抽出された。いずれにおいても【看護】というカテゴリは抽出されなかった。原著論文で取り扱われている疾患は、脳血管疾患と骨粗鬆症であり、これは寝たきりやQOLの低下につながりやすいことから、「アクティブエイジング」、「健康寿命」という側面では研究が多いことが考えられた。総説・解説・特集からは、疾患としては生活習慣病と更年期が抽出された。原著論文とのカテゴリの違いは、日本の研究者が国内で原著として発表せずに国外で発表している可能性が考えられた。今回の研究を行うことで、日本においては「アクティブエイジング」という用語を用いた研究がほとんど行われていないことが明らかとなった。2025年を迎えるためには、更に「アクティブエイジング」、「健康寿命」という視点での研究数を増やしていく必要があると考えられた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、データ分析、研究の進行管理を担当。(担当頁特定不可能) 共著者名：徳重あつ子、荒木大治、鈴木みゆき、岩崎幸恵、小澤みずほ
9. 高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者における非麻痺側筋肉量の変化からみた排泄援助のあり方についての検証 《査読付き》	共	2014年03月	老年看護学、18 (2)、pp. 38-47	本研究の目的は、高齢男性の回復期脳卒中の片麻痺において、排泄援助方法によって非麻痺側筋肉量の変化に違いがでるのかを明らかにすることである。65歳以上の回復期脳卒中患者14人を対象に、入院2週目と3か月目に排尿援助の調査および非麻痺側筋肉量の測定をした。その結果、尿意のある患者は、全員が車いすで移動し、トイレでの排尿を行っていた。一方で、尿意があいまいもしくはない患者は、全員

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
10. The Reinforcement of Local Residents' Sense of Coherence: A Longitudinal Study (地域住民の健康保持能力 (SOC) の強化に関する縦断的検討) 《査読付きを英文化》	共	2014年03月	Yearbook on Journal of the Japan Society of Nursing Research 2013, http://www.jsnr.jp/yearbook/	<p>が排尿に伴う移動はなく、オムツもしくは膀胱留置カテーテルでの排尿を行っていた。トイレで排尿を行っていた患者 (筋肉量4.30±1.02kg、増加量0.04±0.61kg) は、そうでない患者 (筋肉量3.69±0.58kg、増加量-0.14±0.86kg) に比べ、有意に非麻痺側下肢筋肉量が大きく (p=0.014)、入院中の非麻痺側下肢筋肉量の増加も大きい傾向 (p=0.094) があった。介助を受けながらであっても、立位保持が促される排尿援助を受けることにより、非麻痺側下肢筋肉量の維持・向上につながる可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。 (担当頁特定不可能) 鈴木みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵</p> <p>健康保持能力といわれる首尾一貫感覚 (以下、SOCとする) の強化要因の明確化を目的とし、20歳以上の地域住民3,000人を対象に、平成14年及び平成18年に自記式質問紙による縦断調査を実施した。両年の回答に不備のない360人分を分析対象とした。日本版SOC13項目スケールにてSOCの経年的変化を求め、「性別」「年齢」「学歴」「世帯の収入」「社会との関わり」「ソーシャルサポート」「幼少期体験」「青年期体験」「20歳までの経済状況」「生活ストレス」「緊張処理の成功体験」との関連性をPearson積率相関係数で算出し、相関がみられた項目の重回帰分析を行った。結果、「20歳までの経済状況」「緊張処理の成功体験」が強化要因として抽出された。豊かな「20歳までの経済状況」はSOCを低下させ、「緊張処理の成功体験」はSOCを強化することが示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。 (担当頁特定不可能) 共著者名：田中小百合、榎本妙子、堀井節子、三橋美和、徳重あつ子、福本恵</p>
11. The effects of color stimulus on autonomic nervous system activity and subjective arousal state (自律神経活動と主観的覚醒度に及ぼす色彩刺激の効果) 《査読付き》	共	2013年09月	International Journal of Japanese nursing care practice and study, 1(2), pp. 13-17	<p>本研究では、家庭における色彩刺激が自律神経活動と主観的覚醒度に及ぼす影響について検証を行った。この研究は高齢者の意識レベルの向上を目指したケアを実践するための基礎研究である。テーブルクロスの色のみを変化させた。検証にはマンセル色相環を用いた。色は高彩度の赤、黄、青、無彩色は黒と白を選択した。日常生活で用いられる黒、黄、白のテーブルクロスで、自律神経活動の有意な活性化が認められた。同時に、赤を除いたすべての色で、緊張軽減の効果があった。我々は、日常の看護の中で身体的、精神的活性化のために色彩刺激を用いることが可能であると考えている。</p> <p>本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。(担当頁特定不可能) 共著者名：徳重あつ子、山本美輪</p>
12. 地域看護学実習でのHIV/エイズ予防普及啓発活動から得た学び 《査読付き》	共	2013年09月	明治国際医療大学誌、9、pp. 23-28	<p>保健師とともに地域看護学実習の一環として行った啓発活動から得た学びをHIV/エイズに関する知識面と保健師活動の2点から明らかにすることを研究目的とした。研究対象は2010年12月の地域看護学実習中に啓発活動を体験した看護学生6名である。対照群として同管内で同時期に実習を行った5名を設定し、実習前後に2群への質問紙調査を実施した。その結果、知識問題における実習前後の得点差の2群間比較では、HIV/エイズの基礎的問題で有意差がみられ、項目ごとの正答率も上昇していた。保健師活動についての自由記述からは『啓発活動の手段』『啓発活動のねらい』『HIV/エイズに関する保健師活動の実際』の категория、啓発活動を体験した学生から多くのサブカテゴリーが抽出された。このことより、啓発活動という1つの実習体験が保健師活動の学びの拡大に繋がる可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。 (担当頁特定不可能) 共著者名：田中小百合、松川泰子、徳重あつ子</p>
13. 訪問看護における補完代替療法実施の実態調査 《査読付き》	共	2013年05月	日本統合医療学会誌、6(1)、pp. 83-92	<p>訪問看護における補完代替療法 (CAM) の実施について実態調査を行い、CAM普及のための示唆を得ることを目的とした。全国のステーションの約30% (1,700施設) を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。回答のあった約35%がCATを実施していたが、中には初めて知ったとの回答もあり、CAMの知識と実践力はステーションによって差があることが明らかとなった。CAMを実施している施設では、費用はステーションからの持ち出しが半数であった。また、CAMの継続のためにはスタッフの知識や技術が必要との回答</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
14. 脳波からみた介護老人福祉施設入居者における仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活動《査読付き》	共	2011年07月	日本老年医学会雑誌、48(4)、pp.378-390	<p>が多かった。CAMを実施していない施設スタッフの興味と将来の実施可能性との関係について、X2独立性の検定を行ったところ、$p=0.000$で有意な関連が認められた。CAMの普及には、知識や技術の向上のための機会の提供や、スタッフの興味への働きかけが必要であると考えられた。</p> <p>本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、調査用紙発送、データ入力、データ分析等を担当。(担当頁特定不可能)</p> <p>共著者名：徳重あつ子、田中小百合</p> <p>本研究では、仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波のパワースペクトルを用いて分析し、姿勢変化がもたらす脳活動について検証を行うことを目的とした。対象者は介護老人福祉施設入居者17人(男性4人、女性13人平均年齢85.35 ± 8.26歳)である。データ収集は、頭側挙上を行ったベッド上での坐位と椅子又は車椅子を利用した坐位の2種類の設定で行った。測定項目は、脳波(8点、Fp1:左前頭極部、Fp2:右前頭極部、F3:左前頭部、F4:右前頭部、C3:左中心部、C4:右中心部、O1:左後頭部、O2:右後頭部)である。測定時間は、仰臥位5分、坐位15分、会話5分である。分析区間は5分毎とし、ベッド挙上時と椅子への移乗時のデータは除外して分析した。脳波はFFT後、α帯域成分(8~13Hz)とβ帯域成分(13~30Hz)のパワー値の平均値を区間毎に算出した。</p> <p>ベッド上坐位では、仰臥位時と比較して姿勢変化による有意なパワー値の増加はみられなかった。椅子坐位では、全ての測定部位で有意なパワー値の増加を認めた。また、全部位で椅子坐位の方がベッド上坐位よりパワー値が有意に大きい時間帯が多かった。特に会話においては、Fp2以外は全て椅子坐位の方がベッド上坐位よりもパワー値が有意に大きかった。このことより、仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす大脳活性は、姿勢変化後20分間に関してはベッド上坐位よりも椅子坐位の方が大きいことが示された。</p> <p>本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。(担当頁特定不可能)</p> <p>共著者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、片山恵、木村静</p>
15. Using salivary amylase to measure stress caused by urinating in diapers (唾液アミラーゼを用いたオムツ内排泄に関連したストレスの測定)《査読付き》	共	2011年03月	Aino journal, 9, pp. 11-13	<p>この研究では、客観的におむつ内排泄によって生じる患者のストレスを唾液アミラーゼを用いて測定を行った。研究対象者は、健康な20-21歳の成人であった。唾液アミラーゼの平均値は、排尿前51.0 ($SD \pm 4.6$) KIU/L、排尿後38.1 ($SD \pm 12.3$) KIU/Lであった。安静時の唾液アミラーゼの平均値は32.8 ($SD \pm 13.3$) KIU/Lであった。これらの結果は、おむつ内での排尿に関連したストレスが唾液アミラーゼを用いて測定することができることを示唆している。この結果は、認知症や廃用症候群等でコミュニケーションをとることが難しい人々のおむつの使用に関連するストレスの評価に適用することができる。</p> <p>本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。(担当頁特定不可能)</p> <p>共著者名：山本美輪、徳重あつ子</p>
16. Relativity of postural change into prone position and effect of bowel intestinal peristalsis activation for elderly people (高齢者に対する腹臥位への体位変換と腸蠕動運動促進効果の関連性)《査読付き》	共	2011年03月	Health and Behavior Sciences, 9(2), pp. 117-126	<p>この研究の目的は、健康な高齢者を対象にして、腹臥位への体位変換と腸蠕動運動の促進効果の関連性を明らかにすることと、排便促進効果へ方向づけをすることである。実験は、65歳以上の健康な高齢者21名(男性13名、女性8名)に対して行われた。実験では、仰臥位を10分間続け、続いて腹臥位を30分間維持し、次に仰臥位を10分間続けた。それぞれの体位期間を10分間で分けた。そして、それらの期間を仰臥位前期、腹臥位I期、腹臥位II期、腹臥位III期そして仰臥位後期と設定した。収集したデータは腸蠕動運動を調べるための腸音と自律神経活動(交感神経指標：LF / HF比、副交感神経指標：LogHF)であった。各期間に、腸音と自律神経活動の多重比較を行った。結果として、腸音においては、腹臥位への体位変換中の30分間に、減少していく傾向が現れた。仰臥位前期、腹臥位II期、腹臥位III期と仰臥位後期の中では、仰臥位後期の腸音が有意に増加していた($p < 0.05$)。30分間の腹臥位への体位変換後の仰臥位後期に腸音パワー値の増加があったことから、腸蠕動運動の促進には、腹臥位への体位変換による腸管への刺激や腹部刺激に関連する自律神経の反射、血流量の変化が影響していると考えられた。本研究の結果から腸蠕動運動は腹臥位から仰臥位への体</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
17. 腹臥位への体位変換が便秘症の糖尿病患者にもたらす排便促進効果《査読付き》	共	2011年01月	日本健康医学会雑誌、19(4)、pp. 186-194	<p>位変換によって促進することが明らかになり、排便促進効果にむけての示唆を得ることができた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：片山恵、阿曾洋子、伊部亜紀、鈴木みゆき、徳重あつ子、本多容子、田丸朋子</p> <p>本研究の目的は、便秘症の糖尿病教育入院中の患者に対し腹臥位の施行による排便促進効果を検証し、腹臥位施行が便秘症に対する対症療法になり得るかを検討することである。結果、腹臥位実施前後の仰臥位での腸音パワー値の比較において、腹臥位施行後の仰臥位の腸音パワー値が増加しており有意差が認められた（$p=0.004$）。このことから腹臥位施行による腸蠕動運動の促進が確認された。また、実験群と対照群を設定し、継続的に腹臥位を施行し、施行前と施行中の排便回数を比較した。その結果、腹臥位実施前後では実験群の方が排便回数が多く、有意差が認められた。実験群と対照群の排便回数の比較では、実験群の方が有意に排便回数が多かった。これらの結果から、腹臥位施行による排便促進効果が明らかとなった。腹臥位は、特殊な道具や技術が必要ではなく簡便に施行できる方法であることから、便秘症を改善する対症療法となり得ることが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：片山恵、阿曾洋子、伊部亜希、鈴木みゆき、徳重あつ子、本多容子、田丸朋子</p>
18. 地域住民の健康保持能力（SOC）の強化に関する縦断的検討《査読付き》	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp. 75-82	<p>健康保持能力といわれる首尾一貫感覚（以下、SOCとする）の強化要因の明確化を目的とし、20歳以上の地域住民3,000人を対象に、平成14年及び平成18年に自記式質問紙による縦断調査を実施した。両年の回答に不備のない360人分を分析対象とした。日本版SOC13項目スケールにてSOCの経年的変化を求め、「性別」「年齢」「学歴」「世帯の収入」「社会との関わり」「ソーシャルサポート」「幼少期体験」「青年期体験」「20歳までの経済状況」「生活ストレス」「緊張処理の成功体験」との関連性をPearson積率相関係数で算出し、相関がみられた項目の重回帰分析を行った。結果、「20歳までの経済状況」「緊張処理の成功体験」が強化要因として抽出された。豊かな「20歳までの経済状況」はSOCを低下させ、「緊張処理の成功体験」はSOCを強化することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）（担当頁特定不可能） 共著者名：田中小百合、榎本妙子、堀井節子、三橋美和、徳重あつ子、福本恵</p>
19. 在宅女性高齢者に対する「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討《査読付き》	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp. 55-63	<p>幅広い高齢者が対象となる転倒予防として、足へのケアが有効であると考え足浴に着目した。被験者は女性高齢者20名で、1人の被験者に対し、座位にて足浴を行う足浴実験と、行わない対照実験の2種類を実施した。実験の前後で足関節背屈角度と足底荷重最大値の測定を行い、測定値の前後差との関連を検討した。その結果足浴後、背屈角度及び足指部の荷重最大値が有意に増加していた。また、実験前の背屈角度は転倒経験のある群の方が、ない群より有意に小さかったが、足浴後は差はなくなった。さらに足浴後、増加した背屈角度及び足指部の荷重最大値と、転倒経験には相関がみられた。結果より、足浴の温熱効果で背屈角度が増加し、重心が前方に移動しやすくなったため足指部の荷重最大値が増加したと考えられる。このことから前身体が向上し、歩行状態が改善されたと推測される。ここから足浴は女性高齢者の「転倒予防ケア」として有効であることが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、田丸朋子、木村静、徳重あつ子、鈴木みゆき、細見明代</p>
20. 移動援助時におけるベッドの高さの違いが患者におよぼす影響について-頸部後屈角度・心拍数の観点から-《査読付き》（日本看護研究学会 奨励賞受賞）	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp. 25-32	<p>本研究の目的はベッドの高さの違いが患者に与える影響について検証することである。被験者は70歳以上の健康高齢者19名とし、患者が昇降しやすい高さ看護師が作業しやすい高さのベッドそれぞれで移動援助を行った。測定指標は頸部後屈角度及び心拍数とした。最大頸部後屈角度は看護師の作業しやすい高さに比べ、患者の昇降しやすい高さでの援助時の値が有意に大きかった（$p<0.01$）。心拍数は平均値及び変化率ともに移動前・移動中・移動後のどの区間も有意差はなかった。しかし平均値及び変化</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
21. 男性高齢者に対する足浴の転倒予防効果の検討《査読付き》	共	2010年08月	人間工学、46(4)、pp. 277-281	率の多重比較では、看護師の作業しやすい高さでは差がなく、患者が昇降しやすい高さのベッドでのみ、移動前と移動中の値との間に有意な増加がみられた ($p < 0.01$, $p < 0.05$)。以上より、移動援助時にベッドを看護師の作業しやすい高さに調節すると患者の頸部や心拍数への影響が少なくなるといえる。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、鈴木みゆき、徳重あつ子、細見明代
22. ベッドの高さの違いからみた移動援助時の患者の頸部筋負担及び看護師の作業効率への影響《査読付き》	共	2010年02月	人間工学、46(1)、pp. 10-15	健康な男性高齢者を対象として、足浴が転倒を予防するケアとして有効かどうかの検討を行った。同一の被験者に足浴を実施する実験（足浴実験）と足浴を実施せずに安静とする実験（対象実験）を行い、足関節背屈角度、歩行時の足底荷重最大値、歩幅の比較を行った。その結果、足浴後は足関節の背屈角度、歩行時の足底荷重最大値、歩幅が増加することが明らかとなった。今後は、転倒予防ケアとしての実用化に向けて研究を継続していく。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、田丸朋子、徳重あつ子
23. 脳波計測に基づく仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活性についての研究《査読付き》	共	2009年02月	生体医工学、47(1)、pp. 15-27	ベッドの高さの違いによる看護師の作業効率の違いが患者の頸部筋負担に及ぼす影響について、検証を行った。看護師にとっての易作業高と不易作業高の二種類の高さのベッドで、胸鎖乳突筋の積分筋電図最大脊柱挙上角度、頸部後屈角度、援助の所要時間に有意差がみられた。これは、不易作業高での援助時、看護師役が患者役の脊柱を挙上し、患者役の頸部がより後屈し、このような姿勢が安楽でないために患者役が無意識に顎を引き、頸部筋負担が増大したと考えられる。安楽でない姿勢を取る時間の延長も患者には負担であるといえる。結果、不易作業高での援助時、看護師の作業効率は低下し、患者の頸部筋負担を増加させることが明らかとなった。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、鈴木みゆき、徳重あつ子
24. 回復期脳卒中片麻痺患者の非麻痺側筋肉量と本的ADLとの関連《査読付き》	共	2009年01月	日本健康医学会雑誌、17(4)、pp. 3-9	仰臥位から坐位へ姿勢を変化させることが大脳を活性化させるかどうかについて、脳波計測に基づいた検証を行った。結果、脳波パワー値はヘッドアップ80度では仰臥位よりも坐位での値が有意に高かったが、30度では有意差は部分的であった。角度比較では、80度の値が30度よりも有意に高く、脳活性の持続時間は80度の方が長かった。主観調査では、仰臥位よりも坐位、30度よりも80度での覚醒度が高いとの回答が多かった。仰臥位から坐位への姿勢変化は大脳を活性化させ、その効果はベッドの挙上角度によって異なることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
25. 体圧分散マットレスの安楽性と安全性の評価《査読付き》	共	2007年03月	看護人間工学研究誌、7、pp. 29-35	研究目的は、回復期脳卒中片麻痺患者の非麻痺側筋肉量と基本的ADLとの関連を明らかにし、ADLを維持するための非麻痺側筋肉量の意義を検討することである。bioelectrical impedance analysis (BIA)法による筋肉量の測定、Barthel Index (BI)による基本的ADLの評価を行い、その関連性を分析した。結果、非麻痺側上肢筋肉量とBIのうち、トイレ動作と排尿コントロールの各得点との間で有意な正の相関関係が認められた。また、非麻痺側下肢筋肉量とBIのうち、食事、整容、トイレ動作、排便コントロール、排尿コントロールの各得点、BI総得点との間で、有意な正の相関関係が認められた。非麻痺側筋肉量が大きいとBI得点も大きいという関係があり、特に下肢においてはその関係が強いことが明らかとなった。これより、回復期の脳卒中片麻痺患者において、非麻痺側筋肉量が増えれば、基本的ADLの維持・向上につながる可能性が考えられた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
26. ADLの維持と褥瘡予防を両立させるための体位分散マットレスの評価 — マットレス上での起き上がり動作時の沈み込み、筋活動量、動きやすさの観点から — 《査読付き》	共	2007年02月	日本褥瘡学会誌、9(1)、pp. 81-86	レス)を設定し、安楽性をみるために寝心地評価と、安全性をみるために端坐位保持中の身体安定性の評価を行った。その結果、厚みが薄めで枠ありウレタンが寝心地の各要素で嗜好性が高く、安楽性に優れていた。また、端坐位保持中の身体安定性についても枠有ウレタンが汎用マットレスとほぼ差がなく、汎用マットレスと同等の安全性であることが示された。褥瘡のリスク保持者でベッド上での自力動作も可能な人の場合、体圧分散能力もあり、安楽性・安全性でも優れている枠有ウレタンの選択が望ましいと考えられた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。(担当頁特定不可能) 共著者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵、前田知徳
27. 全身清拭動作における看護者の負担動作の筋電図からみた検討 — 広背筋への負荷を指標として — 《査読付き》	共	2005年02月	看護人間工学研究誌、6、pp. 23-29	体圧分散マットレスは褥瘡発生予防に有効であるが、自力動作を阻害する危険性があるため、本研究では動きやすさの評価を行った。結果、身体の沈み込みは、エア、ウレタンフォーム、ポリエステルの順に大きく、沈み込むほど筋活動量が大きくなるという関係がみられた。このことより、体圧分散マットレス使用者で自力で動作も可能な場合は、沈み込みが小さく柔らかすぎないウレタンフォームマットレスの使用が望ましいことが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。(担当頁特定不可能) 共著者名：岡みゆき、阿曾洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵
28. 全身清拭が精神的慰安に及ぼす影響 — 自律神経活動と主観調査から — 《査読付き》	共	2005年02月	看護人間工学研究誌、6、pp. 17-22	表面筋電図を用いて、全身清拭動作における看護者の負担のある動作について検討を行った。その結果、看護者の負担は動作の対象となる清拭部位が看護者から遠い左上肢と左下肢で大きく、看護者から清拭部位までの距離が負担の要因と考えられ、作業域の検討の必要性が示唆された。また、背部清拭時は上肢を大きく動かすことが負担となっており、清拭時の姿勢にひねりが生じていることより、姿勢が看護者の負担となることが推測された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。(担当頁特定不可能) 共著者名：松尾香織、阿曾洋子、矢野祐美子、伊部亜希、木村静、岡みゆき、徳重あつ子、酒井真紀、笹山貴子、井上智子

その他

1. 学会ゲストスピーカー				

2. 学会発表				
1. Relationships Between the Usage for ICT Device and the Psychological and Physical Status for Older Adults Living Alone in Japan	共	2019年01月	22nd East Asian Forum for Nursing Scholars (EAFONS) 2019, Singapore, Abstract Book Poster Presentation for Day 1, pp. 80 (シンガポール)	1人暮らしの高齢者のICTデバイスの利用と心身の健康状態の関係性を明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、ICTデバイスを使用しなかった高齢者では、ICT装置を使用している高齢者よりも、基本的なADL / IADLおよび自己評価健康が有意に低かった。 Keiko Sugiura, Keiko Yokojima, Atsuko Tokushige
2. 独高齢者に対するコミュニケーションロボットを用いたライフログの効果	共	2018年09月	第49回日本看護学会へルスポモーション、岡山、抄録集p. 101 (岡山)	日中の行動をロボットの問いかけに応じてロボットに話しかけ、その内容を記録することが、認知機能に影響を与えるかを検討を行った。その結果、コミュニケーションロボットを用いて日中の行動を意識することで、独居高齢者の認知機能を活性化できることが示唆された。 横島啓子、杉浦圭子、徳重あつ子、久山かおる

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. 高齢者施設の生活場面での危険予測にいたる看護学生の気づき	共	2018年08月	第28回日本看護教育学会学術集会、横浜、抄録集p. 138 (横浜)	医療安全教育において、危険予知につながる気づきを育むことは重要である。本研究では、看護学生が高齢者施設での危険予知でどのような気づきから予測を行ったのかを明らかにすることを目的とした。その結果、高齢者施設の生活場面での危険予測にいたる看護学生の気づきでは、転倒転落の危険性を最も多く予測し、介助を受ける高齢者の【生活行動】の動きよげも【環境】や【活動を支える道具】に気づきがあった。＜車椅子＞と関連して＜立ち上がる＞や＜ブレーキ＞への気づきがあり、臨地実習での実践経験から観察の必要性を学んだことが反映していた。高齢者の姿勢や体格などの身体的な特徴に関する記述は少なく、危険予測をより個別に行うための課題と言える。 小川宣子、徳重あつ子
4. 地域包括支援センターの看護師による閉じこもり高齢者への介入内容	共	2018年07月	第49回日本看護学会 在宅看護、佐賀、抄録集p. 105 (佐賀)	閉じこもり高齢者が何らかの支援の利用に至ったプロセスを明らかにするために、看護師がどのような介入を行ったか検討することを目的として研究を行った。その結果、地域包括支援センターの看護師は、①定期的に訪問し、対象者のニーズをつかみ信頼関係を形成し、②看護師としての知識や技術を活用しながら、心身の状態から必要なサービスを提案し、継続した関係性への支援を行うことで、閉じこもり高齢者がサービスを含めた支援を受けることができるように介入していた。 松山美恵子、横島啓子、徳重あつ子
5. 高齢者に対する視覚運動系学習課題と認知機能評価テストとの関連性の検討	共	2018年06月	日本老年看護学会第23回学術集会、久留米、抄録集p. 166 (久留米)	本研究では、認知障害の評価の一つである視覚運動系学習課題検査と一般性の高い認知機能評価テストとの関連性の検討から、視覚運動系学習課題の有用性を考察することを目的とし、高齢者71名に対して、視覚運動系学習課題およびMMSE、FABをおこなった。randomの平均施行時間は170, 200ms、2×5課題は263, 438msであった。2種類の課題とMMSE、FABとは有意な相関関係がみられた（相関係数：-.28～-.46）。2課題を独立変数としたROC曲線のAUCはrandomとFABの組み合わせが最も高く.643だった。2×5課題ではMMS E、FABともに感度が低く約50%程度であった。 杉浦圭子、横島啓子、久山かおる、徳重あつ子、岩崎 幸恵
6. 感染管理認定看護師（CNIC）の業務の現状と課題—郵送調査による検討から—	共	2018年02月	第33回日本環境感染学会学術集会、東京、CD-ROM (東京)	病院に所属するCNICの高齢患者と家族の指導上の課題および業務全般の課題を明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、高齢患者と家族に対しては、入院中から退院調整を視野に訪問看護等との連携体制作りが必要と考えられた。業務全般については、CNICの実践技術の核であるサーベイランスを行うための支援の必要性が明らかとなった。また、共通の課題として、スタッフ教育や職員の意識改革があったことから、CNICが教育を実践しやすい職場の体制作りが必要であることが考えられた。また、CNICが課題として上位にあげている患者介入については、関係者の意識や職場の体制などを含め、今後の検討課題であると考えられる。 寫ひかり、徳重あつ子、横島啓子
7. Change in Images on Elderly Persons After Four-Year Nursing Education: Comparison with Students of Other Faculties (4年間の看護学教育後の高齢者イメージの変化：他学部学生との比較)	共	2018年01月	21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences, Seoul, p. 890 (ソウル)	看護学生の高齢者観について入学時から4年次まで縦断的に調査を行い、老年看護学の教育内容を検討することを目的とした。理工学部、経済学部の学生との比較を行ったところ、高齢者観については看護学部の学生有意にポジティブであった。しかしながら、エイジズムについては、他学部との差はなかったため、教育の必要性が示唆された。 Atsuko Tokushige, Kyoko Kimbara, Noriko Ogawa
8. Consideration of geriatric nursing education from the viewpoint of people's impression of Older Adults (高齢者イメージから考える老年看護学教育)	共	2017年10月	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 44th Biennial Convention, Indianapolis, https://stti.confex.com/stti/bc17/webprogram/Paper87356.html (インディアナポリス)	研究者の所属する大学の学生を対象に、入学時から卒業直前までを通して、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的として研究を行なった。高齢者観では、1年次について、同居経験のある学生の肯定項目の一致率が、同居経験のない学生よりも有意に高かった (p=0.003)。学生と同居している祖父母は入院や施設に入居していない状態であるため、比較的元気な高齢者が多いと考えられる。このことから、入学時点では同居

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
9. 高齢患者と家族に対する感染予防のための指導の現状と課題—感染管理認定看護師への実態調査から—	共	2017年08月	第43回日本看護研究学会、東海、抄録集p. 281 (東海)	<p>経験のない学生との差が生じたと考えられる。実習で疾患を持つ高齢患者と接することによって、同居経験の有無による差が小さくなったと考えられるため、同居経験のある学生には、特に実習において急激なネガティブなイメージ変化が起こらないような教育の工夫が必要であると考えられる。</p> <p>Atsuko Tokushige, Kyoko Kimbara, Noriko Ogawa</p> <p>感染管理対策の活動と役割を中心的に担っている感染管理認定看護師 (Certified Nurse in Infection Control : 以下CNIC) に着目し、高齢患者とその家族に対する感染予防と管理の指導に関するCNICへの調査を行ない、その現状と課題について明らかにすることを目的として研究を行なった。高齢患者と家族に対する感染予防の直接的な指導は「できている」「少しできている」の回答を合わせてそれぞれ30%程度であった。高齢患者とその家族に対する感染予防と管理の困っていることとして「マンパワー不足」が多く、CNIC自身が考えている課題として「在宅・施設・地域への取り組み」が多かった。</p>
10. 看護学生の高齢者観から考える老年看護学教育—入学時と卒業時の高齢者観・イメージの比較から—	共	2017年06月	第22回日本老年看護学会、名古屋、抄録集p. 177 (名古屋)	<p>寫ひかり、徳重あつ子、横島啓子、梅澤路絵</p> <p>看護学生の高齢者観について入学時から4年次まで縦断的に調査を行い、老年看護学の教育内容を検討することを目的とした。高齢者観スケールでは、4年次生で有意に肯定項目との一致率が高かった。形容詞対によるイメージでは、統計的な有意差は認められなかったが、学年が進行するにつれて、「病気がち」「遅い」等のネガティブな方向に点数が推移していた。自由記述については、ポジティブな面では、入学時は高齢者を「アクティブな存在」、卒業前では「やさしい存在」としてとらえる記述が多かった。ネガティブな面では、入学時は「難聴」や「身体機能の低下」等の一次老化、卒業前では「疾患を持つ存在」としての記述が多かった。実習でネガティブなイメージ変化を急激に起こさないよう、低学年より様々な健康レベルの高齢者についての理解が深まるような内容を授業に取り入れることが必要であると考えられた。</p>
11. 在宅における感染予防管理に関する研究の動向—2007年～2014年の国内文献から看護に焦点をあてて—	共	2017年02月	第32回日本環境感染学会学術集会、神戸、抄録集p. 502 (神戸)	<p>徳重あつ子、金原京子、小川宣子</p> <p>在宅における感染予防管理に関する研究の動向を看護に焦点をあてて明らかにすることとした。その結果、論文件数は1年あたり1～8件で2009年が最も多く、研究対象は「療養者」、データ収集方法は「質問紙調査によるデータ収集」が多かった。研究内容は「感染管理の基礎的技術」「医療処置における感染管理」「組織的に行う感染管理」が多い傾向であった。質問紙による実態調査の研究が多く、今後は対象やデータ収集方法を拡大していくことの必要性が示唆された。</p>
12. Basic Research of Reminiscence Therapy in Nursing Measured by Near Infrared Spectroscopy (NIRS) (NIRS測定による看護に活かす回想法の基礎的研究)	単	2016年07月	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 27th International Nursing Research Congress, CAPE TOWN, http://stti.confex.com/stti/congrs16/webprogram/Paper79481.html (ケープタウン)	<p>寫ひかり、徳重あつ子、横島啓子、久山かおる</p> <p>本研究では、光イメージング脳機能測定装置を用いた評価を行い、大脳を刺激する看護ケアとして活用が可能かどうか基礎的な検証を行うことを目的とした。その結果、左右の脳活動に差が認められなかったことから、回想は前頭葉全体を使用することが示された。</p>
13. Sexual Awareness and Education of High School Students (高校生の性意識と性教育について)	共	2016年03月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Chiba, Abstract Book Poster Presentation pp. 695-696 (千葉)	<p>高校生の性に対する意識を学年別に調査し、性教育への示唆を得たので報告する。男女で比較を行ったところ、男子の性意識は肯定的かつ多面的であるが、女子は否定的であったため、性教育は性差を考え、肯定感のもてる働きかけが必要である。</p>
14. Impressions Held by College Students of the Elderly - Comparison of Nursing Faculty and other Undergraduate Students (大学生が高齢者に持つイメージ—看護学部生と他学部生との比較—)	共	2016年03月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Chiba, Abstract Book Poster Presentation p. 331-332	<p>Yukiko Akai, Atuko Nakashima, Mariko Tazimal, Masako Miyamoto, Midori Nagusa, Chizuko Yamamoto, Kyoko Hosako, Atuko Tokushige, Izumi Takenaka, Ki yoko Sakaguti</p> <p>看護学部、経済学部、理工学部生命科学科、理工学部電気電子工学科の入学直後の学生に対して、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。その結果、高齢者の理解度は他学部の学生と同じであり、医学的な知識と共</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
15. 看護に取り入れる回想法の基礎的研究	単	2015年12月	(千葉) 第35回日本看護科学学会学術集会、広島、講演集p.306 (広島)	にエイジズム等の意識への教育も必要であることが示された。 Atsuko Tokushige, Chika Nanayama, Kyoko Kinbara, Yukiko Akai 認知症の高齢者に対して個人回想法を用いた介入を実施し、光イメージング脳機能測定装置を用いた評価を行い、認知症を改善する看護ケアとして活用が可能かどうか検証を行うことを目的とした。回想画像、対照画像、回想画像を用いた会話では、会話において前頭葉の活性化が認められた。また、主観調査の結果からも、回想を行うことによって覚醒度が上がったことが示された。
16. Basic Verification to Adopt Colors for the Nursing Care (看護ケアに取り入れる色彩についての基礎的検証)	単	2015年07月	Sigma Theta Tau International's 26th International Nursing Research Congress, Puerto Rico, https://sigma.nursingrepository.org/handle/10755/601770 (プエルト・リコ)	看護を行う環境の中に取り入れた色彩が、前頭葉活動と主観的覚醒度に与える影響について近赤外分光法を用いて基礎的な検証を行った。その結果、簡便に使用できるテーブルクロスによる色彩刺激によって、前頭葉が活性化することが確認できた。
17. 前頭葉活性からみた看護ケアに取り入れる色彩刺激の基礎的検証	単	2014年09月	第22回日本人間工学会看護人間工学会総会・研究発表会、大阪 看護人間工学研究誌、15、p.58 (大阪)	看護を行う環境の中に取り入れた色彩が、前頭葉活動と主観的覚醒度に与える影響と嗜好との関連性について近赤外分光法を用いて基礎的な検証を行った。看護を行う環境の中で取り入れることを考慮し、5色(赤、青、黄、緑、白)のテーブルクロスの色彩の違いによる検証を行うこととした。その結果、一番覚醒度が高いと回答した色、好きな色、嫌いな色については、安静開眼時と安静閉眼時共に、色彩刺激時との比較では、有意な値の増加が認められた。主観調査では、一番覚醒した色と好き又は嫌いな色との一致率は80%であり、色彩の嗜好と大脳活性との間には関連があることが示された。
18. Home Visit Nurse's Thoughts for Complementary and Alternative Medicine (CAM) in Japan	単	2014年07月	Sigma Theta Tau International's 25th International Nursing Research Congress, HongKong, https://sigma.nursingrepository.org/handle/10755/335465 (香港)	本研究では、日本の訪問看護における補完代替療法(CAM)の実施について調査研究を行った。補完代替療法を実施していない訪問看護ステーションの実施できない理由について、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。同時に、CAMを実施しているベテランの訪問看護師1名にCAM実施についての思いを語ってもらったものの分析も行った。その結果、CAMを実施していない訪問看護ステーションの理由として【知識】【時間】【技術】の不足が挙げられ、ステーションのスタッフの理解や、ステーションの運営母体の理解を得ることの難しさ等の点も抽出できた。また、ベテランの訪問看護師の語りからは、実施者も癒されながら行っていることや、患者の喜びが実施のモチベーションになっていることがわかった。
19. 排尿障害を有する回復期脳卒中患者における行動療法実施の関連要因の検討	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会、大阪、講演集p.403 (大阪)	排尿障害を有する回復期脳卒中患者における行動療法実施状況を明らかにし、実施に関連する要因を検討することを目的として研究を行った。リハビリテーション科を有し、リハビリテーション(脳血管)のある近畿圏の病院のうち、事前に郵送許可が得られた病院を対象とした。調査票の回収率は75.7%であった。行動療法は76.2%の病棟で実施されていたが、病棟の種類によって実施室は異なり、排尿障害を有する回復期脳卒中患者の誰でもが行動療法を受ける機会があるとは限らないことがわかった。また、排尿援助への関心の重要性も示された。
20. 低学年看護学生における高齢者理解の現状から考える老年看護学教育		2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会、大阪、講演集p.548 (大阪)	鈴木みゆき、竹田千佐子、徳重あつ子 本学の低学年の学生を対象に、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的として研究を行った。研究対象は、入学直後の1年生と、高齢者看護学の講義受講前の2年生である。その結果、1年生と2年生では、高齢者の知識や抱くイメージには差がないことが示された。このことより、高齢者に関する知識やイメージは、日常の学生生活では養うことが難しいことが推測されたため、老年看護学の講義や演習では、偏見のない具体的なイメージが持てるような内容を計画的に取り入れていくことの必要性が示唆された。
21. The Suggestion of Preprandial Hand Stimulation Care to Cerebral Activity of Elderly (大脳活性のための食前手洗いの提唱)	単	2013年10月	9th International Nursing Conference 2013 & 3rd World Academy of Nursing Science, Ko	徳重あつ子、板倉勲子、七山知佳 熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、成人と高齢者で差があるかどうか検討を行った。対象者は、健康成人16名(平均年齢21.0±0.7)と老人保健施設入居高齢者13名(平均年齢86.5±10.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
22. Verification of the stimulation to the hand in the elderly with dementia living in a Long-Term Care Health Facility using an electroencephalogram (脳波を用いた老人保健施設入居中の認知症高齢者における手指刺激の検証)	単	2013年10月	16th International Congress of the International Psychogeriatric Association, Korea (韓国)	5) である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。熱布刺激ではα帯域成分、温湯ではβ帯域成分が高齢者では増加し、成人との比較で有意差が認められた。 熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、認知症のレベルの違いで差があるかどうか検討を行った。対象者は老人保健施設入居高齢者13名(平均年齢86.5±10.5)である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。認知症の対象者では、温湯使用で右脳の活性化が認められた。認知症のない人には左右差は認められなかった。高齢者においては、脳機能は右半球が低下すると言われている。本研究の結果から、脳活性という点においては、熱布よりも熱湯を使用した手洗いが効果的であることが示唆された。
23. HIV/AIDS啓発活動に参加した看護実習生へのピアエデュケーション効果	単	2013年03月	日本看護研究学会第26回近畿・北陸地方会学術集会、和歌山(和歌山)	地域看護学実習の一環として、保健所保健師とともにHIV/AIDSの啓発活動を行うこととなった。看護実習生として啓発活動の体験からどのようなことを感じたのかを明らかにすることを目的とし、実習生と同世代の対象に啓発活動を行った効果を検討した。結果より、学生は啓発活動を行うことの意義について学びを得ていたことが示された。また、学生自身のもつ力を自ら体感できたことで、啓発活動におけるピアエデュケーションの重要性を理解したと考えられた。 松川泰子、田中小百合、徳重あつ子
24. 訪問看護における補完代替療法実施の実態調査	共	2012年12月	第32回日本看護科学学会学術集会、東京、講演集p. 370(東京)	訪問看護における補完代替療法(CAM)の実施について実態調査を行い、CAM普及のための示唆を得ることを目的とした。全国のステーションの約30%(1,700施設)を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。CAMを実施していない施設スタッフの興味と将来の実施可能性との関係についてX2独立性の検定を行ったところ、p=0.000で有意な関連が認められた。CAMの普及には、知識や技術の向上のための機会の提供や、スタッフの興味への働きかけが必要であると考えられた。
25. 訪問看護師からみた家族介護者自身の補完代替療法の利用状況	共	2012年12月	第32回日本看護科学学会学術集会、東京、講演集p. 370(東京)	共同発表者：徳重あつ子、田中小百合 家族介護者における補完代替療法(CAM)の実施について、訪問看護師を対象に実態調査を行った。全国のステーションの約30%(1,700施設)を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。介護者自身のCAMの利用は、訪問看護利用者の1割程度であった。がん、難病の利用者を介護する家族の利用が多く、マッサージ、健康補助食品、食事療法の利用が多くみられた。CAMの利用目的では、疲労回復、健康の保持増進、精神安定が多く、77.8%がCAMの効果を得ているとの回答であった。この結果は、介護者の保健行動をとらえる参考になると考えられる。
26. Verification of the stimulation to the hand before a meal in the elderly living in a Long-Term Care Health Facility using an electroencephalogram. (脳波を用いた老人保健施設入居高齢者における食事前の手指刺激の検証)	単	2012年09月	International Psychogeriatric Association International Meeting 2012, Cairns (オーストラリア)	共同発表者：田中小百合、徳重あつ子 熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、認知症の有無とADLの違いについて差があるかどうか検討を行った。対象者は老人保健施設入居高齢者13名(平均年齢86.5±10.5)である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。認知症の対象者では、温湯使用で脳波の活性化が認められた。また、身体的な介護度の高い高齢者においても、熱湯を用いた刺激において、有意な脳活性が認められた。結果から、認知症のある高齢者と介護を要する高齢者では、熱湯を使用した手洗いが効果的であることが示唆された。
27. 脳波を用いた介護老人保健施設入居者における大脳を活性化させるための手洗い援助の基礎的検証	単	2012年07月	第38回日本看護研究学会学術集会、沖縄(沖縄)	介護福祉施設入居者を対象とし、温湯と熱布の手指刺激による大脳の活性化が異なるかどうか検証を行い、食前に覚醒度を上げるための高齢者の手洗い援助ケアについて示唆を得ることを目的とした。対象者介護老人保健施設入居者13名(平均年齢86.5±10.5歳)である。測定指標には、脳波を用いた。温湯使用では、全ての測定部位において、温熱刺激時で大脳の活性化が認められた。熱布使用では、大脳の有意な活性化は認められなかった。温湯と熱布では大脳の活性化が異なることが示されたことから、生体を活性化させる高齢者の食事前の手洗いとしては、熱布よりも温湯を使用することが望ましいことが示された。
28. Verification of hot cloth use as hand washing before meal by difference posture between supine position and sitting position	共	2011年10月	The 3rd Korea-Chine-Japan Nursing Conference, Korea (韓国)	仰臥位と坐位の姿勢の違いによって、熱布を用いた手指刺激による生体の活性化が異なるかどうか検証を行うことを目的とした。その結果、食事前に大脳を活性化させるという点から手洗いの援助を考える

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
tion that uses an electroencephalogram. (脳波を用いた仰臥位と坐位での姿勢の違いによる食事前の手洗い援助としての熱布使用の検証)				と、熱布使用の場合は仰臥位よりも坐位姿勢となるよう援助を行うことが望ましいことが示唆された。 徳重あつ子、山本美輪、田中小百合、松川泰子、小石真子
29. The Effects of Colored Tablecloth on Autonomic Nervous System and Subjective Arousal: The Possibility of Using a Color Effect for Nursing. (カラーテーブルクロスが自律神経系と主観的覚醒度に与える効果：看護における色彩効果活用の可能性について)	共	2011年07月	World Academy of Nursing Science, 2nd International Nursing Research Conference, Cancun (メキシコ)	本研究における研究目的は、家庭環境内に取り入れた色彩が、自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響について基礎的な検証を行うことである。その結果、テーブルクロスのような簡易なもので、覚醒度を上げたり、リラックス効果を得たりすることが可能であることが示されたため、看護での活用も可能であることが明らかとなった。
30. 熱布と温湯の比較による大脳を活性化させる看護技術としての手浴—脳波と唾液アミラーゼの分析から—	単	2010年12月	第30回日本看護科学学会学術集会、札幌、講演集p.528 (札幌)	手指への刺激が大脳を活性化させるかどうか、また熱布と温湯の手指刺激方法の違いによって、生体の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについて、健康な成人で基礎的な検証を行うことを目的とした。その結果、快適さの観点からみると、熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいと考えられた。
31. The effects of color stimulus on autonomic nervous system activity and subjective awareness (テーブルクロスの色彩の違いが自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響の検証)	共	2010年11月	第2回日中韓看護学会、東京、抄録集pp.200-201 (東京)	研究目的は、家庭環境内に取り入れた色彩が、自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響について基礎的な検証を行うことである。その結果、自律神経活動評価指標データからは、有意差が認められた黒がインパクトの強い色彩であることが示されたが、主観調査では黄が最も覚醒度が高いという結果であった。この理由としては、今回用いた有彩色の中では、黄が最も明度が高く、鮮やかに見えた可能性があることと、目覚めという感覚にマッチしていたことが考えられた。このことより、食事やレクリエーション前のセッティングとして、自律神経活動を活性化させるために色彩刺激の活用があると考えられる。
32. Verification of seated posture assist to activate the brain of older persons in a welfare institution by analyzing electroencephalogram (脳波の分析による福祉施設入居高齢者における大脳を活性化させる坐位姿勢援助の検証)	共	2009年09月	第1回日中韓看護学会、北京、抄録集p.223-225 (北京)	仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波のパワースペクトルを用いて分析し、大脳を活性化させる坐位姿勢援助について検証を行った。その結果、椅子坐位のみにも有意な脳活性が認められたことにより、大脳を活性化させる坐位姿勢援助としては、ベッド上坐位よりも椅子坐位の方が望ましいことが示された。
33. 施設入居高齢者における仰臥位からの座位への姿勢変化がもたらす脳活動	共	2008年12月	第28回日本看護科学学会学術集会、福岡、講演集p.186 (福岡)	仰臥位から座位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波を用いて分析し、大脳を活性化させるケアとしての座位姿勢援助の有効性について検証を行った。施設に入居している高齢者においては、ベッド上での座位姿勢で大脳の活性化を促すことは困難であることが今回の研究により明らかになった。大脳を活性化させる準備姿勢として高齢者に座位姿勢を促す際には、可能な限り椅子や車椅子への移乗援助を行うことが望ましいと考えられる。
34. 仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活性への有効性についての研究	共	2008年09月	生体医工学シンポジウム2008、大阪、抄録集CD-ROM (大阪)	脳波を用いて仰臥位から坐位に姿勢を変化させた時の大脳の活性化を検証した。脳波パワー値はヘッドアップ80度では仰臥位よりも坐位での値が有意に高かったが、30度では有意差は部分的であった。角度比較では、80度の値が30度よりも有意に高く、脳活性の持続時間は80度の方が長かった。主観調査では、仰臥位よりも坐位、30度よりも80度での覚醒度が高いとの回答が多かった。仰臥位から坐位への姿勢変化は大脳を活性化させ、その効果はベッドの挙上角度によって異なることが示唆された。
35. 健康な高齢者におけるベッド上坐位姿勢の角度の違いによる自律神経活動の比較	共	2007年03月	日本人間工学会 第15回システム大会、東京、抄録集CD-ROM (東京)	高齢者においては、自律神経活動の低下が指摘されており、ケアの安全性の検証は重要である。本研究では、健康な高齢者において仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の自律神経活動を評価し、生体に与える影響の検討を行った。HR、%LF、HFの変化は緩徐であり、外的刺激の認識も鈍化しており、日常生活に問題のない高齢者においても、加齢による機能

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
36. 健康若年者におけるベッド上での坐位への姿勢変化がもたらす脳活動ー脳波、大脳局所Hb、心電図分析よりー	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会、神戸、講演集p.349 (神戸)	<p>低下の存在が推測された。このことから、機能維持のための積極的な働きかけの必要性が示唆された。</p> <p>徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、木下慈子</p> <p>ベッド上で仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を生理学的な指標を用いて分析し、大脳を活性化するケアとしての坐位姿勢援助の有効性について基礎的な検証を行った。受動的なベッド上坐位姿勢での大脳と交感神経活動の活発化を確認することができたため、坐位姿勢には生体を活性化させる作用があると考えられる。これを看護の観点からみると、ケア効果を高めるための使用可能性が示唆された。</p>
37. 仰臥位から坐位への姿勢変化が生体に及ぼす影響ー自律神経活動指標と左前頭葉局所Hb値の検討からー	共	2006年03月	日本人間工学会第14回システム大会、東京、抄録集CD-ROM (東京)	<p>徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、片山恵、岡みゆき、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子</p> <p>仰臥位からベッド上での坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態の検証を、脳波と近赤外線装置を用いて行った。比較したヘッドアップ角度は80度と30度で、脳波、大脳局所Hb共に角度によって異なる変動をみせた。ヘッドアップ角度が80度の方が30度よりも活性化を示し、重力による影響が考えられた。</p>
38. 坐位姿勢の脳活性への有効性に関する基礎的研究ー前頭葉の脳波分析からー	共	2005年10月	第26回バイオメカニズム学術講演会、栃木、抄録集pp.143-144 (栃木)	<p>徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子</p> <p>廃用性脳機能低下の予防的アプローチは、高齢社会における看護の視点として重要である。脳への働きかけを行う看護の基本ケアとして坐位姿勢援助を位置付ける為の基礎的な検討を行うことを目的とした。特に、今回は坐位姿勢の中でもベッドのギャッチアップによる坐位姿勢に着目した。仰臥位からギャッチアップ坐位への体位の変化による大脳の活性を、前頭葉の脳波の解析によりとらえることができた。</p>
39. 脳波からみた坐位姿勢への有効性の基礎的研究ーパイロット・スタディー	共	2005年09月	第13回看護人間工学会総会・研究発表会、京都 (京都)	<p>徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜季、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子</p> <p>坐位姿勢の第一歩であるギャッチアップによる坐位に着目し、仰臥位から坐位への姿勢変化による脳活性を脳波でとらえることを試みた。結果、仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の脳活動の活性化を脳波でとらえることができた。看護ケアにおける坐位姿勢援助の重要性を検証することを目的とした基礎的研究のパイロットスタディとして本研究を位置付け、分析手法等の土台とした。</p>
40. 寝床内気候からみたエアマットレス使用時の体位変換時間の検討	共	2005年05月	第1回日本褥瘡学会近畿地方学術集会、大阪、日本褥瘡学会誌、6(4)、p.667 (大阪)	<p>徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜季、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子</p> <p>エアマットレス上に2時間安静臥床した時の寝床内気候と身体圧迫部位の皮膚温を測定し、適切な体位変換時間の検討を行った。体位変換については、2時間で89.5%という仙骨部の多湿状態が確認されたため、エアマットレスを用いる際には、2時間以内に行うことが望ましいと考えられた。また、どんなに有効な褥瘡予防具が開発されても、用具を吟味して使いこなして適切なケアを計画することは、看護を実践する者に必要な視点であることが確認出来た。</p>
41. エアマットレス使用時の寝床内気候についての検討	共	2004年09月	第12回看護人間工学会総会・研究発表会、東京、抄録集p.12 (東京)	<p>徳重あつ子、阿曾洋子、矢野祐美子、伊部亜希、松村敦代</p> <p>2時間の安静臥床条件でエアマットレスを使用した時の寝床内気候と身体圧迫部位の皮膚温を測定し、適切な寝床内気候について検討を行った。寝床温度、寝床湿度、仙骨部皮膚温、肩甲骨皮膚温、不快指数のデータは、快適とはいえないという結果であった。これらはエアマットレスの疎水性素材と関連があると考えられた。更に実験に用いたエアマットレスは静止型であり、セルの膨縮がなく常に背部と接していたことも原因の1つと考えられた。</p> <p>徳重あつ子、阿曾洋子、矢野祐美子、伊部亜希、松村敦代</p>
3. 総説				
1. Mariah Snyder博士に学ぶ看護における補完代替療法2 《依頼原稿》	共	2010年03月	看護実践の科学、35(4)、pp.60-65、看護の科学社	平成21年9月に明治国際医療大学看護学部教育講演会に招聘したMariah Snyder博士の講演内容を基に、日本において補完代替療法を実施する際の課題について述べた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
2. Mariah Snyder博士に学ぶ看護における補完代替療法1 《依頼原稿》	共	2010年02月	看護実践の科学、35(3)、pp.46-50、看護の科学社	本人担当部分：Snyder博士が指摘した課題について、日本における解決方法について考察を行った。（担当頁特定不可能） 共著者名：徳重あつ子、五十嵐稔子、西山ゆかり、田口豊恵、小山教代、浅野敏朗、種池禮子 平成21年9月に明治国際医療大学看護学部教育講演会に招聘したMariah Snyder博士の講演内容を基に、補完代替療法の歴史や日本の状況について述べた。 本人担当部分：世界における補完代替療法の歴史について担当した。（担当頁特定不可能） 共著者名：五十嵐稔子、徳重あつ子、田口豊恵、西山ゆかり、小山教代、浅野敏朗、種池禮子
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 回想を促し大脳を活性化させる認知症高齢者との会話の検討	単	2017年	武庫川女子大学 科学研究費学内奨励金	回想を促す会話が認知症高齢者の大脳を活性化させるかどうか検証を行い、看護介入としての回想法の実施方法の検討を行うことを目的として研究を行った。
2. Basic Research of Reminiscence Therapy in Nursing Measured by Near Infrared Spectroscopy (NIRS)	単	2016年	日本私立看護系大学協会（国際学会発表助成）	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 27th International Nursing Research Congress, CAPE TOWN 上記学会での発表について助成を受けた。
3. 脳波と光イメージング脳機能測定による看護における回想法の検証	共	2012年04月～2018年3月	科学研究費補助金（基盤研究C）24593544	研究代表者 本研究では、認知症の高齢者に対して個人回想法を用いた介入を実施し、脳波と光イメージング脳機能測定装置を用いた評価を行い、認知症を改善する看護ケアとして回想法の活用が可能かどうか検証を行うことを目的として行った。
4. 脳波による座位姿勢と組み合わせた誤嚥の危険性を低減させる食前の手指清潔ケアの検証	単	2009年04月～2011年3月	科学研究費補助金 若手研究（スタートアップ）21890282	研究代表者 寝たきりの高齢者や認知症のある高齢者においては、食事摂取時に大脳の覚醒状態が十分でない誤嚥の可能性が高い。その点から、食前には覚醒度を上げる看護ケアが必要であると考える。そこで、本研究においては、食前の手洗いの実施方法の違いが大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうか検証を行うこととした。
5. 色彩が自律神経活動ならびに主観的覚醒度に及ぼす影響についての基礎的研究	単	2009年	明治国際大学学内公募研究	研究代表者 色彩が人体に与える影響について、自律神経活動と主観的覚醒度のふたつの側面について基礎的な検証を行った。
6. 新任期保健師の活動計画立案と評価能力育成プログラムの開発	共	2008年4月～2010年3月	科学研究費補助金（基盤研究C）20592644	研究分担者 新任期の保健師が保健活動に不可欠な企画立案と評価能力を身に付けられるよう教育プログラムを作成し、その有効性について評価を行った。
7. 健康高齢者における大脳と自律神経活動からみた座位姿勢の有効性の検証—機能低下予防のための看護ケアアプローチとして—	共	2006年08月～2007年3月	フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団第17回研究助成	研究代表者 仰臥位からギャッチベッド上での座位へ姿勢を変化させた時の大脳と自律神経の活動を検討し、座位姿勢援助の有効性について、基礎的な検証を行うことを目的として研究を行った。 徳重あつ子、阿曾洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、宮嶋正子、木下慈子

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年10月27日	第26回看護人間工学部会総会・研究発表会 大会長
2. 2018年04月01日～現在に至る	バイオメカニズム学会理事

学会及び社会における活動等

年月日	事項
3. 2018年03月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会 実行委員
4. 2017年11月11日	第25回看護人間工学部会総会・研究発表会 実行委員
5. 2017年06月11日	第19回日本母性看護学会学術集会 協力委員
6. 2016年09月03日	第15回日本アディクション看護学会 実行協力員
7. 2016年04月01日～現在に至る	学部「まちの保健室」事業 プロジェクトメンバー
8. 2014年08月23日	第40回日本看護研究学会学術集会 実行委員
9. 2014年	第22回看護人間工学部会総会・研究発表会 事務局
10. 2012年09月01日～現在に至る	日本人間工学会看護人間工学部会 看護人間工学研究誌編集委員
11. 2012年05月01日～2018年3月31日	バイオメカニズム学会 評議員
12. 所属学会	日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本老年看護学会、日本老年医学会、日本人間工学会、日本褥瘡学会、日本生体医工学会、日本健康医学会、バイオメカニズム学会、日本統合医療学会、日本環境感染学会、看護教育学教育学会、日本人間工学会看護人間工学部会、日本褥瘡学会近畿地方会、日本地域看護学会、日本公衆衛生学会、看護質的統合法（KJ法）研究会、GAPNA（Gerontological Advanced Practice Nurses Association）、IPA(International Psychogeriatric Association)、STTI（Sigma Theta Tau International）